
童貞男は英雄となって異世界でリア充を目指す

神城匠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

童貞男は英雄となって異世界でリア充を目指す

【Nコード】

N3494BA

【作者名】

神城匠

【あらすじ】

童貞のまま二十歳になった青年上村光太郎は、風俗店に向かう途中、人語を操るフェレットと出会い、「君だけが持つ特殊な力で僕たちの世界を救ってほしい。英雄になってほしい」と言われる。風俗店で童貞卒業を果たすより、英雄となって堂々と童貞を卒業した方が格好いいという理由で異世界に赴くことを決意した彼は、とある銀河系にある小さな王国ヴェスパニアに転生する。

童貞卒業を果たすために英雄となることを決意した彼は、手に入れた神の力を使い、仲間とともに、まずはヴェスパニア王国に迫る危

機に立ち向かうのだが……。

前回投稿した拙作「俺に銀河を救えるか？」の改訂版です。

序話 全ての始まり

太陽系第三惑星・地球が属する天の川銀河から、さらに彼方へ行ったところに、とある銀河系が存在し、その辺境に一つの国があった。

その名は、ヴェスパニア王国と言う。

首都を置く緑豊かな惑星アストレアを中心に、幾つかの惑星と、それに付随する衛星を支配する銀河でも指折りの中堅国家だが、この国は目下危機に瀕している。

というのも、行きすぎた文民支配と官僚主義が祟って、鈍重かつ頭でっかちな軍事小国と化してしまったこの国に、近隣の大国ジュピウス帝国が目をつけ始めたからである。

ジュピウスは、ヴェスパニア征服を実現するべく宇宙艦隊の整備増強に力を注ぎ、その戦力は既に艦艇五万隻、人数にして五〇〇万人規模に達したという。ジュピウスの宇宙艦隊は、ヴェスパニアに程近い幾つかの小惑星や衛星を次々と占領下に置き、軍事基地を設営するなど、征服に向けた準備を着実に整えつつあるというが、それなのにヴェスパニア王国の上層部は、相も変わらず軍の存在を軽んじ、いつもの如く貢物を捧げさえすればジュピウスの凶悪な牙から逃れることができるかと本当に信じ込んでいるようなのであった。

だが、ヴェスパニア支配下の諸惑星、諸衛星の地下に豊富な資源が眠っている以上、貪欲なジュピウスが些細な貢物程度で手をひっ

こめてくれるはずがない。またジュピウスは、ヴェスパニアが誇る神秘的な力にも興味を示しているという。これは単なる伝説に過ぎないが、ヴェスパニアには銀河世界の構造を根本から変革しうるほどの凄まじい力があるとされ、銀河征服を狙うジュピウス帝国皇帝がこれに目を付けたのも無理ない話であると言えなくもなかった。

こうなつては、もはや、どんな外交努力も、国を守る上では何の役にも立たないのだということに気が付いたヴェスパニアの王子アウグスト・デイ・ヴェスパニアは、まず王を説得して軍の強化に力を注ごうとしたが、文民支配の妄執に凝り固まった官僚集団に阻まれて、諦めざるを得なかった。

しかし、憂国の志に燃えあがるアウグスト王子は、方針を変更し、今度は一つの伝説に全ての未来を託してみることにした。

その伝説と言うのは、ヴェスパニア王国を作り上げた初代国王ジュリアン・デイ・ヴェスパニアが遺した遺言書に記されていたもので、曰く、

『余の治世より一〇〇〇年の月日を経た後、我が王国は危急存亡の秋を迎えるであろう。その時、余の末裔たちが、もはや我が王国に未練なしと判断するのであれば、潔く滅びの道を歩むのもよからう。だが、なお未練があるのであれば、異界への門を開き、神の御心の思し召すままに？英雄？を召喚するのだ。その者とともに戦えば、我が王国には再び一〇〇〇年の繁栄が蘇るであろう』

とあった。

そして今、隻眼の悪魔王と言われたジュリアン大王が崩じて一〇〇〇年の月日が過ぎた。大王の遺言は歴代の国王に引き継がれながら、次第に伝説と化していき、ついには誰からも相手にされなくなっていたが、アウグスト王子は、今こそが遺言に記された？危急存亡の秋？であると考えたのである。

そこで王子は、神官団を呼び寄せた上で、如何に？英雄？を召喚

すればよいのかを尋ねた。

神官長は答えた。

「殿下の血と眼が必要でございます」

と。

王子は頷いた。王国のためであれば、いつでもこの身を捧げる覚悟はできている。そんな勇ましい王子の発言に満足した神官長は、配下の神官団とともに王都アストレア・シティより北に三〇〇キロほど行った先にあるジュリアン大王の霊廟に赴くと、その地下にある壮麗な地下宮殿の中へと蔵かに入ってしまった。

祭壇は地下宮殿の奥深くに安置されていた。

トカゲのような形をした巨大な石像の下に、人が一人寝転ぶには十分な大きさの石のベッドがあった。トカゲの石像は、よく見ると、片方の目がなく、その小さな手のひらの上には、ぼつねんと一つの壺が置かれていた。

神官長は言った。

「召喚の儀は、正しき王家の血脈を受け継ぎし者の力なくしては行えませぬ。殿下におかれましては、その御身体に流れる血と、今一つ、その透き通るような瞳の一つを神に捧げてくださいますように」

と。

アウグスト王子は静かに頷き、神官長に促されるまま、石のベッドの上に寝転んだ。すると、居並ぶ神官たちが、呪文を唱えながら、

わらわら王子の周りに歩み寄ってきて、そして神官長はおもむろに短剣を懐から取り出すと、麻酔もせず王子の左目から眼球をくりぬいた。

神官長は、くりぬいた眼球を、トカゲの目に埋め込み、流れた血は、壺の中に注ぎ込んだ。

その上で、神官長及び神官たちは、大仰に呪文を唱え始めるのだった。

すると。

天地が蠢き、時空が歪みだした。

全てが終わった時、トカゲの頭の上に一匹のフェレットがひよっこりと突っ立っていて、居並ぶ王子と神官たちをじろりと見下ろしていた。

「さあ、神の分身よ。異界の門は今ここに開かれたり。異界に赴き、神より賜りしその特殊な力を用いて、我らを導き救う英雄を呼び寄せたまえ！」

神官長が声高にそんな風に叫ぶと、フェレット……のように見えた気高き小動物は、歪みだした時空の狭間へと勢いよく飛び込んでいって、王子たちの目の前から完全に姿を消した。

時に銀河暦二〇〇一年九月六日のことである。

第1話 童貞男の決心

もう二十歳になるというのに、未だ年齢〃彼女いない歴となつて
いる青年上村光太郎は、その日、ついに童貞を捨て去る決意を固め
て、大学にも行かずに色町に繰り出すことにした。

この日のために、夜も眠らず昼寝して、バイトを重ねてお金をた
めてきた。その戦果たる十万円が、今、彼の財布の中に唸っている。
昨晚、慌ててコンビニに駆けこんでATMから手数料込で引き出し
てきた、大切な大切な軍資金であった。

これだけあれば、少なくとも二度ぐらいは楽しめるだろう。いず
れにしても、これでようやく童貞を卒業できるのだ。お金の力で叶
える……と言うのが少しだけ気に食わないが、このまま何もしなけ
れば、十年後も童貞のまま、魔法使いへと昇華してしまいそうで
怖かったのだ。

車に飛び乗り、ネットで調べた店の住所を打ち込む。

所要時間は二十分と出る。

エンジンをかけ、ゆっくりとアクセルを踏み込むと、車は自然と
動き出した。

「……いよいよ、か」

時計を見ると、午前十時ジャスト。

今頃大学では普通に講義が行われている頃だろう。今日の講義に
出席しなければ単位は取得できないが、童貞を卒業できることに比
べればさしたる問題ではない。友人には風邪をこじらせたから休む
とメールを送つてあるし、友人が上手くやってくれれば、出席した
と教授を誤魔化すことも不可能ではなかった。

「いざ、出陣だ！」

意を決し、前を見る。

そこに広がっている光景は、相変わらずいつもと同じだった。閑静な住宅街、そこを出ると、長閑な田園風景が広がり、やがて商店街が軒を連ねる町が見えてきた。

空は曇っている。

いつ、雨が降り出しても不思議はない感じ。

童貞卒業という記念すべき日には全く相応しくない空模様に光太郎の気分は下降気味。

その時、急に信号が赤になった。

慌ててブレーキを踏み、車はその場に急停止する。

「フウ」

停止線は軽く超えてしまったが、辛うじてセーフだろう。

そう思って安堵のため息を吐いた、まさにその時。

「ねえ、君にお願いがあるんだよ。これは非常に大事なお願いなんだけど、聞いてくれるかい？」

そんな声が、どこからともなく響いてきて、彼はギョツとなつて周りを見回した。しかし、ここは車の中だ。誰もいるはずがない。

「今、僕たちの世界は危機に瀕しているんだ。だから君の力があるんだ。君の力で僕たちの世界を救ってくれないかい？」

それなのに、やはり声がして、光太郎の背筋は一瞬にして凍りついた。

まさか、幻聴？ だとすると、ついに俺おわた！

「あ、もしかして僕のこと気づいてない？ ここだよ、目の前にいるんだよ」

声の主は、ひよこひよここと歩いてきて、ボンネットの上にちよこんと腰を下ろした。

それは、真っ白なネズミのように見えるが、フェレットにも見える。濁り一つない純白の毛並みが特徴的なそいつは、にっこりと微笑みながら光太郎の顔をジッと見つめている。

「気付いた？ で、話は元に戻るんだけど、僕は君の力が欲しいんだ。僕たちの世界を救えるのは君だけだからね。まあ、別に難しいことじゃないんだ。うん、って頷いてくれさえすれば後は僕たちが万事整えるからさ。ね、僕たちを助けてよ。僕たちは英雄を欲しているんだ」

そんな風に言うこの小動物は、家の屋根裏とか店や工場の片隅などによく巣食っている薄汚いドブネズミとは全てにおいて違っていった。格好もそうだが、漂う気品、風格……何もかもが。

しかし、光太郎にとってそんなことははつきり言っただうでもよいことだった。どこから見てもネズミの範疇を超え得ない小動物が平然と人語を操っているという厳然たる事実には、彼は驚きを隠せなっていたのだった。

「……………は？」

呆然状態の光太郎の口から飛び出した第一声は、そんな間の抜けた問いである。

「あ、あのさ、な、何言つてんだか全然分かんないんだけど。つてかお前なに？ 何で喋ってんの？ い、いや、俺、夢でも見てんのかな？ 初めて童貞を卒業できるからって舞い上がりすぎて幻でも見てんのか？ うわあ、いよいよ俺も終わりかあ……。いろんな意味で終わってるよ、俺……」

「童貞？ 卒業？ 僕も君がいつたい何を口走っているのかよく分からないんだけど、とにかく、これは夢でも幻でもないんだよ。現実なんだ」

小動物はそう言うてにつこりと微笑んでみせた。

しかし……。

ネズミに限らず人間以外の存在が人語を自在に操るなどというメルヘンチックな世界からは、十年近くも昔に卒業したはずの光太郎には、目の前の光景や現実が理解できない。というよりむしろ理解したくなかった。納得したくなかった。

「でもね、面白いと思うよ。楽しいと思うよ。怖いけどスリルはあるけど、変哲のない人生を何気なく過ごすよりはよっぽど有意義だと思うよ。何しろ君は、英雄になれるんだから。僕たちの世界では君しか英雄にはなれないんだから。だからさ、僕たちの世界に来て力を貸してよ。その特別な力を僕たちのために使ってよ」

「有意義、ねえ」

少なくとも、彼女いない歴〃年齢のまま二十歳を迎え、焦燥の余りに金の力で童貞卒業を図ろうとしている今の自分よりは、確かに有意義な生活を送れるのかもしれない。二流、三流の私立大学でぐうたらな学生ライフを送っている自分が英雄になれる可能性など皆無なのだから、この意味不明な小動物の誘いに乗った方が有意義な人生を送れるに違いない。

しかしである。

そんな都合のいい話があるだろうか。

こんな、どこにでもいる、甲斐性なしの童貞男が英雄になれる世界などあるはずがない。そもそもこんなくだらぬ平凡男のどこにそんな力があるというのだ。

冷静に考えていくと、あり得ないという結論に至る。

ならばこれは……。

ドッキリ、という単語が光太郎の脳裏をよぎっていく。

まあ芸能人でも有名スポーツ選手でも有力な政治家でもない自分にドッキリ企画を仕掛けるような暇なテレビ局もないだろうが、可能性として皆無でない以上、それしか考えられなかった。童貞を卒業するべく意を決して風俗店に赴こうとしている自分をバ力にするべく、友人たちが画策したこともかもしれない。一応、仲の良い友人には、今日風俗に行くことは伝えてあるのだ。

もしこれがドッキリであるとすれば、全ての事に説明がつく。この喋る小動物も、金のかかった玩具だろう。

だが……。

肝心なカメラや盗聴器のようなものは、全くどこにも仕掛けられていない。そもそも、この車は自分の車で、車の鍵は常時持ち歩いている。よほど凄まじい技術力がない限り、車内に入りこむことは不可能な上、所有者である自分の許可なく車内に侵入すれば、それはれっきとした犯罪だ。テレビ局が、そんな冒険を侵すとは思えなかった。

「なあ、これってマジ話なわけ？」

気が付くと、赤信号は青になっており、光太郎は車を発進させると、すぐそばにあったコンビニの駐車場に停車させた。

その上で、彼は真っ白な小動物をぎろりと睨みつけ、そんな風に尋ねた。

「もちろん」

小動物は満面の笑顔で、きっぱりと断言した。嘘をついているようにも、冗談を言っているようにも思えない。

「……………それでさ、一つ試みに聞くんだけどさ」

光太郎はごくりと息を飲み、フウと静かに深呼吸した。

「なんだい？」

小動物はそんな彼を不思議そうに見上げた。

「英雄になったらさ、その、お、女とかに、もてたりするのかな？」
モテる、という経験がこれまでの人生で皆無な光太郎にとって、それは結構重要な疑問だった。しかしながら、この小動物に答えられる類の疑問ではなかったようで、

「……………」

返ってきた答えは無言だった。

「い、いや、今のなし。忘れて」

英雄は色を好む。そんな言葉がある。

英雄になれば、女は選り取り見取りなのだろうか。そもそも、彼の言う世界の女性とは美しいのだろうか。

いずれにしても、わざわざお金を払って、強引に童貞卒業を果た

すよりも英雄となつて正々堂々と童貞卒業を成した方が格好いいかもしれない。

甚だ不純だが、光太郎の心は次第に異世界へ赴く方へ傾いていった。そもそも、彼にはこの世界にそれほど未練はないのだ。実の父母は幼いころに死んでしまつていないし、育ててくれている叔父夫婦とはそんなに仲が良いわけではない。友達も多くないし、彼女は当然いない。兄弟もいない。ならば、英雄となり、格好良く童貞を卒業できる異世界へ赴いた方が人生バラ色じゃないか。

「でさ、俺には具体的にどんな力があるわけ？ 自分で言うのもなんだけど、俺って結構、駄目な奴だと思つんだ」

駄目かどうかはともかく平凡な人間であることは確か。

そんな自分にどんな力があるというのだろう。この小動物は、自分だけが英雄になれると言つた。自分は特殊な力を持っているから、その力を異世界で是非使つて欲しいと言つた。しかし、当然、光太郎自身にはそんな自覚は全くない。

「君には力があるんだよ。そうでなければ、僕は君にこんな頼みごととはしないよ。僕はこう見えて、神の使者なんだ」

光太郎の結構切実な問いに対する小動物の答えがこれである。

「……………そりゃそうだろうけど、具体的にはどんな力が俺にあるのかって聞いてんだけど」

改めて問い直してみても、小動物はなぜか無言を貫いてくるのだつた。

「……………まあいいや、で、具体的に俺は何をすればいいわけ？

異世界に行つて正義の騎士にでもなればいいのか？ 悪の大魔王を特殊な力とやらでねじ伏せればいいのか？」

ありがちな勧善懲悪物のドラマや映画、アニメを脳裏に思い浮かべ、光太郎は「ははは」と苦笑いした。

「そうだね。まず、僕の国、ヴェスパニア王国が危険な状態にあるから、まずはこれを助けて欲しいかも。その後は、五〇〇年間も続いている銀河系の戦乱に平和を取り戻して欲しいんだ」

小動物はそんな風に言いながら、もぞもぞと忙しく動き始め、瞬く間に車の周りに一種の円陣を描いた。

そして、

円陣が黄金色に輝きだしたかと思うと、外の動きが次第に緩慢なものへと変化していき、最終的に完全にストップした。それまで街道の上を次々と過ぎ去っていった車が、スピードを保ったまま静止しているし、歩いている人間も、その場に固まっている。

「な、なんだ、これは？」

驚く光太郎は、

「な、なにがどうなっているんだ？」

呆然と座席の上に座り尽くしている。

「じゃ、行くよ。あ、そうだ。一つ言い忘れていたけど、時空を移動している間に人間の体は幼児化しちゃうんだ。たぶん、召喚が完了したころには、君は赤ん坊になっているだろうね。でも大丈夫。成長すれば自然と記憶は取り戻すから」

既に異世界への移動は始まっているようで、完全に停止していた世界が突如まばゆく真っ白に輝きだすと、光太郎は初めて自分が別世界へ向かいつつあるのだということを実感した。

が、それ以前に。

小動物の突然のカミングアウトに、彼は驚いた。

幼児化し、赤ん坊になる？

聞いてない。そんな話は聞いてない。しかし、今更「やめて！」

とは言えないし、言ったところで聞き入れてはもらえないだろう。

英雄になって正々堂々童貞を卒業したい。たったそれだけの理由で、異世界へ行くことを決意した自分を、今更ながらに後悔し始めていたが、時既に遅しである。

そうこうしているうちに時空移動は着実に進んでいき、上村光太郎の意識は彼方の先へと消えていった。

第2話 死の契約

「ん、もう、朝？ …… ってあれ、ここって……。ちよ、ちよっと待った。お、俺、今、なにしてんの？」

見上げると、見知らぬ天井。

見回すと、見知らぬ風景。

真っ白なベッドの上に眠らされていた青年レオンハルト・ノエル・サンジユストは、ゆっくりと起き上がるなり、頭の中が混乱状態に陥った。

「い、いや、ここ、どこ？ あれ、俺、ちょっと……」

その時、頭に激痛が走る。

慌てて手を当ててみると、コブのようなものができていた。

ああ、そうだ。確か、仲間と一緒に玉蹴りをやっていて、友人が蹴った玉が頭に激突して意識を失ったのだ。余所見をしていたとはいえ、ボールが直撃したぐらいで意識を失うとは、我ながら情けないと思いつつ、彼は違和感のようなものを覚えていた。

ここは学校の保健室のはずである。

それなのに、初めて来たような、そんな感じがするのだ。これまでにも何度か世話になっているはずなのに……。

「な、なんなんだよ、このモヤモヤ感は……。なんか大事なことを忘れてるような……」

思いだそうとすると、ずきずきと頭が痛む。コブが痛むのではなく、頭の内部からずっしりと痛みがこみ上げてくるような、不思議な感覚であった。

だからといって思いだせないままと言うのも非常に気持ちが悪いのだ。

故に彼は頭の痛みは我慢して、必死になって頭の中を整理してみるのだが、しかし肝心なことは何一つ思いだせそうもない。

もう止めようか。

そう思った時、

「御久し振りだね。光太郎君。いや、今はレオンハルト・ノエル・サンジユスト君だったね」

そんな声が朗々と響き渡り、レオンハルトはギョツとなって辺りを見回した。

すると、窓際に一匹の小動物が平然と佇んでいて……。その小動物は、ネズミというよりはむしろフェレットのような感じの真っ白な生き物で……。どこか見覚えのあるそいつの顔を見たとき、レオンハルトの頭の中に一筋の閃光が煌めいた。

「あッ！ お、お前は……」

あと少しだった。

喉まで出かかっている。

後わずか。

「ごちゃごちゃになっているレオンハルトの脳内記憶は、後一ピース揃えば完全に復元されるはずであった。後一ピース。」

「あれ？ おかしいな。まだ完全に記憶は取り戻していなかったの

かな？　これは計算違いだったかな。……………まあいいや。とりあえず君は、僕たちの世界を救うという使命を負ってこっちの世界にやってきた異世界人なんだよ」

「……………は？」

「困惑するのも無理はないよね。何しろ君は赤ん坊のころからサンジユスト家の嫡男として育ってきたんだから。異世界のことなんて知る由もないはずだよ。でも、このことは紛れもない真実なんだよ。君は異世界、地球って星の住人だった。でも異世界からこっちの世界に人間を召喚するには、どうしても幼児化は避けられなくて……………。だから赤ん坊として召喚した君をいったん過去に戻して成長する時間を稼いだんだよ。サンジユスト家に預かってもらったのは、君の御両親が子供を欲しがっていたからだよ」

淡々とした口調で、この小動物は驚くべき新事実を次々と明らかにしていった。

あまりに突飛な話し過ぎて、レオンハルトは半分も理解できていなかったが、それでも自分が元々は異世界の住人であったのだという肝心な部分については理解できていないわけではなかった。しかし、納得できるかと言われれば必ずしもそうではないわけ……………。

「それでなんで君を召喚したかというと、君に世界を救って欲しかったからなんだよ。英雄になってこの世を救ってほしいんだよ。それだけの力が君には備わっている。だからこそ僕は、神の使者として君を選び、召喚したんだ」

と、その小動物は相変わらず淡々とした口調で続けた。

「な、なんのことだよ」

レオンハルトは、呆れたような顔をして、そんな風に呟いていた

ものの、その脳内では、今も必死になって記憶の整理作業が進んでいた。

小動物は、

英雄になれ。世界を救え。

と、言った。

それはなぜか随分と聞き覚えのあるフレーズである。確か、昔、突然現れたネズミだかフェレットだかよく分からぬ小動物に吹きこまれた言葉だ。それに安易に応じた瞬間、彼の世界は変容し、気が付いたら……。

「……………思いだした」

ついにレオンハルトの頭の中に散らばっていた記憶が一つにまとまり、絵となつて彼に真実を告げていた。彼は、目の前にいるこの小悪魔のような小動物に唆されてこの世界に来たのだ。世界を救え、英雄になってくれ、そう言われて、彼は異世界へ旅立つ決心をしたのだ。

今の今まで完全に忘れていたが、確かに自分は異世界出身だ。

お金を払つてこそこそと童貞を捨て去るのではなく、英雄となり、堂々と童貞を捨てたい。そんな実にくだらな理由で、こつちの世界へ来ることを決めたのであるが、振り返ってみると、レオンハルト・ノエル・サンジユストとして暮らしてきたこの一五年間も、恋人どころか女友達一つできぬ女つ気のない日常の繰り返しであった。

「あのさ、本当に英雄になれんの？ 何度も言うけど、俺って極めて普通の凡人だよ。英雄になれる素質なんてないと思うんだ」

恋人一つ作ることもできない甲斐性なしだ。こんな男が、いずれ世界を救う大英雄になるのだなどと言っても、誰も信じないだろう。

「なれるよ。君は自信を持つべきなんだよ。僕は神の使者なんだ。君が選ばれたのは神様の御意思なんだよ」

「……………神様、ねえ」

神によって選ばれた。だから自分には特別な力があって、英雄にもなれるんだよ、と言われてもいまいちピンとこないのだった。そもそも神などと言う存在が本当に存在するのか。まあ、地球とは全く異なる銀河系にやってきている以上、地球の常識がこの常識と常にイコールであるはずがない。しかし、少なくとも彼はこの世界で一五年間過ごしてきたが、しかし、神などという存在に会ったこともなければ、その不思議な力を見たこともない。聞いたこともない。

「それはそうと、レオンハルト君。この前は言っただけで、一連のことは全て神様と君の間で結ばれた絶対の契約なんだ。もしも契約を全うできなかつたら、君は死ぬことになるよ。それだけは肝に銘じておいてほしいんだ」

可愛らしい顔をして、可愛らしい声色で、随分と恐ろしいことを平然と言っただけの小動物を前にしてレオンハルトは言葉を失った。

「まあ、まだ時間的に余裕はあるから、今すぐ契約を執行せよなんて迫ったりはしないんだけどね。僕は監視役兼相談役として、君の側に常にいるよ。聞きたいこととかあったら、いつでも相談してよ。答えられる限りは答えるからさ。それでね。もし契約執行が不可能だと僕が判断したら、僕の手で君を殺してあげる」

全く持って、言っている言葉の内容と口調と表情が、純真無垢で人畜無害っぽい外見とミスマッチであった。

レオンハルトは戸惑いを隠せなかったが、それは別にミスマッチ

それ自体に対してではなく、この天使のような可愛らしい小動物の口から飛び出したとんでもない言葉の中身にある。

英雄になれとか世界を救えとか、この小動物は本気で言っているのだろうか。まあ、確かに今の銀河は五〇〇年も飽きることなく戦争をやってきて、人々は英雄の存在を待ち望んでいるし、そもそもヴェスパニア王国自体が、東の大国ジュピウス帝国に虎視眈々とつ

け狙われていて危急存亡の秋にある。

だが、ヴェスパニアの危機は、もっと偉い人が何とかしてくれるだろう。銀河の戦乱の場合は、どうだろうか。五〇〇年も続いている以上、今更なんとかなるようにも思えない。英雄の登場程度でどうにかなるほど銀河は狭くない。

などと一人静かにレオンハルトが考え込んでいると、

「あ、そうだ。そう言えばまだ僕、名前を名乗っていなかったね。僕の名前はね。コ タローって言うんだよ」

「こ、コ タロー？ …… って、それ確か……」

自分の本名じゃねーか、と突っ込みを入れようとしたところで、

「そうだよ。この名前は君の本来の名前だよ。こっちの世界では使えない名前だね。だから代わりに僕が使ってあげるんだ」

白き小さな悪魔は、開き直ったかのようにそう言っただけで、微笑んだ。

それにしても。

英雄になれ。世界を救え、とこいつは言う。そして、その契約が果たせない時、自分は死ぬという。なんとという無茶ぶり。なんという理不尽な話だろう。

これまでこの荒れた世界を救おうと、何人の男たちが現れては消えていったかしのれない。英雄にはなれるかもしれないが、世界を救

うなど無理なのだ。もしも本当にそれが可能ならば、なんで五〇〇年も銀河は戦争状態を続けていなければならなかったのだ。仮に銀河系に平和をもたらすことができるのだとしても、少なくともそれは自分じゃない。

「ま、君は英雄にはなれるよ。そういう定めのもとに生まれたんだからね。でも世界を救えるかどうかは君たちの努力次第だよ」

そんな風に言いながらコタローは軽やかな仕草でレオンハルトの足と体を伝って肩に登り、耳元でクスクスと笑っていた。

こうしてレオンハルト・ノエル・サンジュストの？英雄としての人生？は始まりを告げた。彼自身、よく分からないうちに、世界を救うというトンでもない使命（全うできなければ死）を負わされた哀れな少年は、ハアと深いため息を吐いてから、高校への道のりを急いだ。

第3話 人生初の握手相手は王女様？

一年が過ぎた。

レオンハルト・ノエル・サンジユストは、この日、めでたく十六歳になる。王都アストレア・シテイに十代以上に渡って居を置き、商家を営みつつ慎ましく暮らしてきたサンジユスト家では、嫡男の誕生日を、精一杯盛大に執り行う予定であった。

着々と準備が進む己の誕生会会場の様子を眺めながら、レオンハルトは思わず苦笑いした。

よくよく思い返してみると、上村光太郎だった当時、誕生日会などというものをした覚えがない。彼自身、そういうことに興味はなかったし、保護者である叔父夫婦は基本的に彼に対して無関心だった。友人の中にも率先して誕生日会を主催してくれるような能動的な者はおらず、結果、彼の誕生日は常にコンビニで買ってきたケーキを一人静かに食べるというのが慣例になっていたのであった。

それなのに、こちらの世界では、誕生日会というのは毎年のこと。そしてそれをレオンハルトは当たり前前のものだと考えてきたが、上村光太郎だった当時のことを思い出した今では、目の前の光景が非常に感慨深かった。

ただ……。

不満が全く皆無というわけではない。

毎年のことだが、彼の誕生日会には女っ気がなさすぎるのだ。彼の友人は、こっちに来てても引き続き男しかいない。唯一の若い女性は、彼の義妹に当たるユリアぐらいなもので、しかし、物心つく前から？妹？として接してきた彼女を一人の女と見ることは、レオンハルトには不可能なだった。

ユリアには、

「俺の誕生会にはな、友達を連れてきてもいいんだぞ」

と言つてあるが、まあ、兄の誕生会に自分の友人を招待する妹もなかなかないだろう。その友人と兄の間に交友関係があるのであればともかく、レオンハルトは、妹ユリアが持っている多くの友人の名前すら全く知らないのだった。

だから結局集まったのは男ばかり。

結局、こういう定めなのかと、レオンハルトは人知れずがつくりと肩を落とした。

「ま、気にすんなよ。代わりに俺たちがキスでもプレゼントしてやるぜ」

悪友の一人、マンフレート・マルクス・マティアス・アルムホルトは楽しそうにカラカラと笑いながら、レオンハルトの肩をぼんぼんと叩いた。

パーティは、まだ始まっていないというのに既に顔が赤くなっている。徹底的に酒好きなの男は、待ちきれなくなつて大人用の席にだけ置かれているワインでも口にしたに違いない。アルコールは二十歳以上などという法律はヴェスパニア王国には存在しないが、それでも十六歳の少年には早すぎるという考えは常識として王国市民の頭の中にインプットされている。

「断固断るね。誰が悲しくて男にキスなんて求めるもんか！」

これまでの都合二度、計三十五年に及ぶ人生で、彼は徹底的に童貞を貫いてきた。女性と付き合ったことはおろか、女性とまともに会話した経験も数えるほどという奥手極まりないチエリーボーイだ。

当然、キスの経験など皆無……のはずなのだが、実はキスに関しては全くの未経験というわけではなかったのだ。

彼の初キスの相手は、虚しいことにユリアだった。幼いころ、ほんの悪戯でユリアにキスしたのが、人生初の？異性？とのキスである。そして、成長した後は、今度はユリアの方がふざけてキスを迫ってくるようになった。一昨日も、彼は自室で睡眠中にユリアに唇を奪われ、こっぴどく叱りつけたばかりであった。

「じゃ、私がキスしてあげるわよ。お兄ちゃん！」

そこへユリアがやってきて、男同士のバカな会話に容赦なく加わってきた。

「お！ 良かったじゃねーか。こんな可愛い娘にキスしてもらえるなんて、男の本望じゃねえか。ははは。よし。じゃ、レオンハルトへの誕生日プレゼントは、パーティー最後のユリア嬢ちゃんからの熱烈な接吻で決まりだ！」

すると、当然の如くマンフレートは悪乗りしてくるのである。

レオンハルトとしては呆れざるを得ない。

ただまあ、ユリアが美少女であるということは認める。さらっと伸びた赤毛をポニーテールに纏め、常に流行の最先端の衣服で決めている。身長は平凡だが、顔立ちが文字通りお人形のように、なんとなく守ってあげたくなるような可愛らしさに満ち溢れていた。そして、この可愛らしい妹とレオンハルトは、別に血の繋がりがあってもいいのだった。

しかし、血の繋がらないということを知ったのは、つい一年前のことで、それまでは真正銘の妹として接してきた。真実を知った後も、彼女が妹であることに変わりはなく、妹としてしか見ていなかったユリアをいきなり女として見ると言われても不可能な話な

のである。当然、彼女から熱烈なキスをプレゼントされても、何となく気持ちが悪いのだ。

「どうだ、嬉しいだろ、レオンハルト。お前の童貞維持記録も、今日でついに終わりか？」

マンフレートは、こう見えて結構なやり手として名を馳せており、もう四年も昔に女性を射止めて以後、何十人という異性と関係を持ち、既に隠し子もいるんじゃないかと噂されるぐらいの御乱行振りを誇っているのであった。

「……………ユリアを妹と知っていてなおそんな風に言ってくる男を友人に持った覚えはないね。全く、どいつもこいつも」

全く、自分の誕生会に来てくれる女性はユリアだけなのか。もっと他にいないのか。

レオンハルトはがっくりと項垂れ、ハアとため息を吐いた。

「っていつかマンフレート。お前、女友達多いんだろ。だったら連れてこいよ」

と、レオンハルトがぼやくように呟くと、

「うーん。まあ、そうだなあ。連れてきてもいいが、お前さんが惨めになるだけだぜ。何しろあいつらは皆俺に夢中なんだからな」

マンフレートは勝ち誇ったような顔をして、憎らしいほど堂々と胸を張るのである。

そんな彼を見て、レオンハルトは何度目になるかしのれないため息を吐く。

「お兄ちゃん。お兄ちゃん。私がいるんだよ。他の女なんていらな
いじゃん。ね、私だったらいくらでもお兄ちゃんの御要望に応じて
あげられるよ。なんなら今キスしても良いし、服だつて脱いであげ
るよ」

「ふ、服つて……」

ユリアは昔からこうと決めたら一直線なところがあつて、周りの
人間を何度となく困らせてきた。まあそういう性格は決して悪い面
ばかりではないのだが、今度ばかりははっきり言つてレオンハルト
にとつて迷惑だつた。

ユリアは、昔から徹底的な兄っ子で、女性からは全くと言つてい
いほどモテないレオンハルトになぜか懐いてきた。まあ、懐いてく
るぐらいは全然問題はないし、逆に兄としては結構嬉しかったのだ
が、最近の彼女はいろいろな点で暴走気味であつた。キスはしてく
るし、事あるごとに自らの裸体を見せようとしてくるし……。もし
彼女が妹でなく、普通の女性であつたら、凄まじく幸せな瞬間なの
だろうと思うが、天地が引っくり返ろうともユリアが妹であるとい
う儼然たる事実に変化はないのだつた。

「全く、俺の周りにはこんな女しかいないのか」

ユリアを除けば、レオンハルトの周りにいる女性は、母親とその
友人たるおばさんばかりである。がっくりと頂垂れるレオンハルト
に、

「君は本当に女が好きなんだね」

それまでだんまりを決め込み、彼の肩の上で愛想を振りまいていたコ タローがおもむろに口を開いてそんな風に言った。

「当たり前だ。っていうか、俺は一刻も早く童貞を卒業したいんだよ。もう俺、十六歳だろ。上村光太郎として二〇年、レオンハルトとして一六年。合わせて三六年も生きているのに、未だ童貞なんだぞ。チエリーボーイなんだぞ。あり得ないよ。本当なら、あの時お前が姿を現さず、余計なことを言ってくれなければ、めでたく童貞卒業を果たして名実ともに大人の男になっていたのに……。お前が余計なことをしてくれたものだから、俺は未だ童貞で、しかも世界を救えなきゃ死ぬなんて理不尽な任務に従事する破目になったんだ」

吐き捨てるようにぼやくレオンハルトに、コ タローは彼の耳元で「ははは」と苦笑いするだけであった。

「あ、そうだよ。罪滅ぼしってわけじゃないんだけど、君の願いを一つだけ叶えてあげようと思うんだ」

不意に、何かを思い出したかのようにそう言いだすコ タローに、

「願います？」

レオンハルトは不思議そうに首を傾げた。

「そうだよ。君は女が欲しいんだね。だから、君に女の人を紹介してあげるんだよ」

「……しよ、紹介？」

「うん。僕の知り合いなんだけど」

そう言つてコ タローは彼の肩の上から飛び降り、そそくさと部屋の外のように走つていった。そのちつぽけな後ろ姿を呆然と見つめながら、レオンハルトは何事だろうと思つていた。

そしてしばらくの後、

コ タローは一人の少女を伴い、会場に戻つてきた。その少女は凄まじい美貌の持ち主で、ユリアとは全く異なる大人の女性といったイメージだった。きりつとした瞳と、全身から漂うオーラは、彼女が一般人とは異なる世界の住人だということを見る者全てに印象付けるに十分であつた。

「レオンハルト。彼女はね」

再びレオンハルトの肩の上に戻つたコ タローは、彼の耳元にそんな風に囁く。

「彼女はね、名前をローゼマリー・ジークリンデ・デイ・ヴェスパニアつて言つんだよ」

「……………」

「要するにね、彼女はね、今のヴェスパニア王バシレウス五世陛下の姫殿下にして、次期国王となられるアウグスト・デイ・ヴェスパニア王太子殿下の唯一の妹君にあらせられる御方なんだよ」

白き小動物による紹介が終わると、ヴェスパニア王の王女様というローゼマリー・ジークリンデ・デイ・ヴェスパニアは恭しく軽くお辞儀をしてからこう言つた。

「あなたが、レオンハルト・ノエル・サンジュストですか。お初にお目にかかります。私は、コ タローの申す通り、ヴェスパニア王の一人娘、ローゼマリー・ジークリンデ・デイ・ヴェスパニアと申

しますが、ローゼマリーで結構です」

年の頃は、十六か十七と言ったところだろう。

気品溢れる見る目麗しい容姿に完全に見惚れていたレオンハルトは、しばしの間、事態が全く掴めていなかったようで、目を白黒させて呆然と立ち尽くしていた。

しかし、やがて冷静を取り戻すと、

少なくとも一つの重大な事実が付いて、レオンハルトは素っ頓狂な声を張り上げた。

「ええええええええ！ ヴェ、ヴェスパニア王のひ、一人娘………
てことは王女様ですか？」

「御静かに願います！」

当然のように驚く彼を、ローゼマリーはすかさず叱りつけた。

レオンハルトは慌てて口を閉ざし、改めて目の前の美女を見やっ
た。

ローゼマリー・ジークリンデ・デイ・ヴェスパニア。

詐称でなければ、彼女は間違いなく王家の姫。しかしコタローが連れてきた以上、詐称であるとは思えない。ならば彼女は紛れもない真正正銘の王家の姫。

そんな高貴なお姫様は、ゆっくりと右手を差し出し、握手を求め
てきた。レオンハルトもまたオドオドとした挙動ながらもそれに
応じた。

そのとき、レオンハルトは気が付いた。

この世界に来て、ついによつやく女性の手を触ることができたの
だ、と。

第4話 神の力を手に入れました。

「コ タロー。この者が、我が国を救う？英雄？なのですか？」

特徴的なピンク色の、透き通るような髪の毛をなびかせながら、ローゼマリーが疑心に満ちた瞳を、コ タローに向けている。

「はい殿下」

コ タローはレオンハルトの肩の上でぺこりと頭を下げた。

「……そうですか。では、英雄さん。あなたには具体的にどんな力があるんですか？」

ローゼマリー王女は、そう言ってジッとレオンハルトの顔を見つめている。

その真剣そのものの瞳に、初心な少年は瞬く間にしどろもどろになってしまう。けれど、少年の心境など分かるはずもないローゼマリーには、そんな彼の態度は頼りないものには見えなかつたわけである。神様によって選ばれた偉大なる？救国の英雄？なのだから、もっと素晴らしい威風堂々たる人間に違いないと想像していたのに、それを完膚なきまでに裏切られた衝撃はよほど大きかつたと見え、彼女はがっくりと頂垂れ、弱弱しく、「いいわ、答えなくても」と言った。

「コ タロー。兄上様が今、この朽ちかけた国を救おうと東奔西走

「あいつ、誰なの？」

ひょっこりと姿を現したユリアは、王女殿下の背中を指差し、どこことなく棘のある口調で、そんな風に尋ねてきた。

「お、おい。あいつって……。あの御方はな……」

まさか、あの少女がヴェスパニア王国王女ローゼマリー・ジークリンデ・ディ・ヴェスパニアであるとは誰も思わないだろう。それなりに立派な格好をしているし、漲らせている雰囲気も常人のそれとはレベルが違っていたが、しかし、サンジユスト家はありふれた一市民でしかなく、その嫡男の誕生会如きに王女が参加するなど、普通ではあり得る話ではなかった。

「レオンハルト、王女様だったことは内密にね」

耳元で、コ タローがそんな風に囁くと、

「あ、そうか」

レオンハルトは慌てて口を閉ざし、そして、静かに己が右手手のひらをぼんやりと見つめた。まだ、この手には、王女のぬくもりが生々しいほど明確に残っていた。生まれて初めてと言っても言い過ぎではない、同世代異性の肌の感触。白魚のように美しく、すべすべした柔肌は、彼のスケベ本能を刺激するに十分過ぎた。

「なあコ タロー。そろそろ教えてくれないか？ 俺にはいつたい

どんな力があるって言うんだ？ いったもお前ははぐらかしてきたけど、俺は？英雄？にならなきゃ死んじゃうんだろ。俺が？英雄？になれなきゃ、この国は終わるんだろ。だったらいい加減、俺に全てを教えるよ。俺にはいつたいたいどんな力があつて、そして俺はどうやって英雄になつて行けばいいんだよ」

ユリアを強引に下がらせた後、レオンハルトは静かな声色ながらもいつになく厳しい口調で、己の肩の上でだんまりを決め込んでいる小動物に、これで何度目になるかしのれない疑問をぶつけた。

すると、

「知りたいかい？」

コ タローはジッと見返してきた。

「ああ」

レオンハルトがことさら大きく頷くと、

「そうだね。じゃあ、明日。時間を作つてよ」

小動物は意を決したようにそう言った。

「明日？」

「うん」

「明日、教えてくれるんだな？」

「うん。神の使者に二言はないよ」

きつぱりと断言するコ タローに、レオンハルトはとりあえず、納得しておくことにした。

翌日。朝。

レオンハルトはコ タローに誘われるまま、家を出、アストレア・シティから北に三〇〇キロ行ったところにあるジュリアン大王廟にやってきた。

到着した時、既に夕方になっていた。

西の空に煌々と輝く紅蓮色の空をぼんやりと眺めていると、

「こつちだよ」

コ タローは大王廟の片隅に隠すように作られていた扉を開き、入っていった。レオンハルトもまたその後に従って扉を潜り、奥深くへと入っていく。

ここがかの有名な伝説上の帝王、ジュリアン大王の霊廟であるということは、レオンハルトも知っている。そして、本来、ここが特別な許可を得た者でなければ立ち入り禁止だということ、無断で侵入できぬように常に近衛兵が守備しているということも知っていた。そのはずなのに、やってきたとき、近衛兵の姿はなく、いとも容易く入り込むことに成功してしまったのだ。それがレオンハルトには不思議でならなかった。

しかし、コ タローはそんな彼の疑問には決して答えず、足早に地下宮殿の奥へ奥へと足を進めていく。

「レオンハルト。君はここで待っていて」

全体が大理石でできた、巨大な不思議な部屋に入った時、コ タ

ローはそう言ってレオンハルトを制止した。

そして、コ タローは一人静かに駆けだし、部屋の奥にでんと構える巨大なトカゲの石像のもとに歩み寄ると、

「さあ来て！ 君に、神の力を与えてあげるよ」

と、高らかに叫ぶように言ったのである。

だからレオンハルトは恐る恐る、しかし確実に歩きだし、石像のもとに向かった。

「レオンハルト。よく聞いて。君には、英雄となる素質がある。だけど、今のままで君には何の力もないんだ。君が持っている特殊な力ってというのは、神の力を受け入れ、吸収し、己が物にできる力のことなんだよ。要するに、君は神様になれるんだよ。より正確に言うと、神様の力を手に入れることができるんだよ。これから僕が言うことをやってくれさえすれば、神様と同等の力を手に入れることができるんだ」

「……………か、神様と同等の力？」

なんだ、それは…………とレオンハルトは呆れたように呟いた。

しかし、石像の頭の上でそう告げるコ タローの表情は本気そのものだった。そこには一片の嘘偽りもなかった。そもそも、コ タローという名前のこの喋る小動物は、嘘というものをつかかない。感情そのものが欠落した、一種のからくり人形みたいな生き物なのだ。そんな奴が言うのだから、嘘でも冗談でもないのだろう。

「さあ、レオンハルト。君は、その手のひらの上にある壺を手にとつて、その中身を思い切り飲み干すんだ。一滴もこぼしちゃ駄目だよ。最後の一滴まで、全部飲み干すんだ」

コ タローは声高に叫び、そして、トカゲの手のひらにぽつねんと置かれている古ぼけた壺を指差した。

「の、飲み干す？」

あんな古ぼけた壺の中に入っている得体の知れぬものを飲め！

そんな風に言われて素直に「分かりました」と答えられるほど、レオンハルトは好奇心旺盛でも無謀でもないのだった。何が入っているのかも分からないし、それに、下手をしたら何百年もほったらかしにされてきた内容物は腐っている可能性もある。お腹を壊すだけならばまだいい。死んでしまったら、英雄どころの話ではなく、その場でジ・エンドではないか。

「あれを飲めるのは残念だけど、君だけなんだ。僕を含めて、こつちの世界に暮らしている者が飲んだら、その圧倒的な力に耐えきれなくて死んじゃうんだよ。でも、逆に言えば、君が飲む限りにおいては死なないよ。逆に君は神と同等の力を手に入れられるんだ。さあ、飲んで」

「……………」

さあ飲んで！

笑顔でそう言われても、難しいものは難しいのである。

だが、コ タローは嘘をつかない。冗談も言わない。それは、一年程度、この小動物と付き合う中で分かった確固たる事実であった。いずれにしても、英雄になってこの国を救わなければ、世界を救わなければ契約違反の咎で死んでしまうのだ。ならば、覚悟を決めて、壺の中身を飲もう。

だからレオンハルトは再び静かに歩きだし、そして、壺を手にとり、しばらく睨みあった末に、意を決してその中身を口の中に思い切りよく流しこんだ。

「これで、君も神様の仲間入りだね」

目が覚めた時、コ タローはレオンハルトのおでこの上でそう言
って笑っていた。

「と言ってもまだ力の使い方を覚えてないから、現時点では基本的
に昔と変わらないんだけどね。ただまあ、神の力を得たからって、
不死身になるわけじゃないし、不老になるってわけでもないんだよ。
でも修行次第では、未来予知だってできるようになるし、その辺に
ある物を自由自在に操ることだってできるようになるよ。それに、
身体能力は極限以上に高まっているから、レーザー一発ぐらい浴び
たって死なないし、そもそも反射神経も常人の数万倍はあるから、
仮にレーザーを撃たれたって、かわすことも可能だよ」

「……………」
「でもまあ、そういう力は全て修行したら得られるわけで、今現時
点では君は常人よりちょっと上ぐらいの力を持ったに過ぎないんだ
けどね」

にこやかにほほ笑み、そんな風に言うコ タローに、レオンハル
トは戸惑いの表情を隠しきれぬ様子で呆然と世界を見回していた。

「そ、それはそうとコ タロー。なんで今頃になって俺をこんなと
ころに連れてきたんだ。もっと早く、例えば俺とお前が再会した一
年前に連れて来たって問題はなかったんじゃないのか？俺が、早
くこの力を手に入れていたら、それだけ早く？英雄？として使いも

のになっただろうに」

頭の中に思い浮かんだ疑問を、とりあえずぶつけてみる。
すると、

「うーん。そうだね。でも、あの時はまだ神の力が完全じゃなかったんだ。ちなみに、君が飲んだ壺の中身だけだね、それはヴェスパニア王家の正統な血脈を受け継ぐ者の血なんだ。その血と神の力が完全に混ざり合うまで待つ必要性があったから、今日まで待ったんだよ」

コタローは相変わらず感情のこもらぬ淡々とした口調で答えるのであった。

いずれにしても、レオンハルト・ノエル・サンジユストはこうして？英雄？となるために必要な力を掴むきっかけを手にし、英雄となる第一歩を、確かに歩み始めたのだった。

第4話 神の力を手に入れました。(後書き)

どーもー。神城です。

突然すいません。いやあ、この作品、思い立ったが吉日とばかりに書き出して投稿したため非常に行き当たりばったり。途中で話書き換えまくりだし、改訂多いし……。ほんとすいません。

後、感想とかあったらお願いします。誤字脱字とかの御指摘大歓迎です。直します全力で！ つまんねーんだよ、バーカ！ なんて辛辣な御意見御感想も、まあ歓迎です(いや、嘘です。わかってはいても露骨に指摘されると辛いです。少しオブラートに包んでくれると嬉しいです)。

当初、この物語では、異能の力とか魔法とか、そういう類のものは極力いれない方向だったんですけど、最初に言った通り、行き当たりばったりのため、やっぱりそういうものも取り入れていくことにしました。SFなんだかファンタジーなんだか戦記物なんだかよくわからないストーリーになっていきそうな予感ですけど、よろしければよろしくお願いします。

第5話 ヴェスパニア王国の危機

ジュピウス帝国軍、動く。

その急報がヴェスパニア王国に届けられたのは銀河暦二〇〇二年四月三日のことで、帝国軍がヴェスパニア王国領に突入するのは、遅くとも二日後の四月五日午後三時ごろと推定されていた。

兵力は、アレクサンドル・アブラーム大将率いるジュピウス帝国宇宙軍第二・第三両艦隊の二万隻で、これは第一陣とのことである。準備が整い次第、また戦況次第によっては、第一、第四両艦隊二万隻も送り出せるので、ジュピウス軍の総兵力は四万隻、人数にして四〇〇万人近くに及ぶことになる。

対するヴェスパニア王国宇宙軍の兵力だが、正規艦隊は二〇〇〇隻程度。本来は守備として本国に残しておかなければならない戦力や、民間企業や警察などが保有している警備艇などにも動員をかければ、五〇〇〇隻程度にはなるだろう。だが、第一陣だけで二万隻を数えるジュピウス帝国軍に太刀打ちできる数ではない。

まさに空前絶後の圧倒的大軍で攻めてきたジュピウス軍は、最前線に位置する衛星オシリスに作りあげた軍事基地にて休息をとると、進軍を再開し、容赦なくヴェスパニア領内に突入してきた。

こんな急報に、

「くそッ！ まだこちらの準備は万端じゃないってのに」

愚鈍な王、バシレウス五世に代わって、ここ最近では国政を事実上掌握しているアウグスト王子は悔しそうに臍を噛んだ。

兎にも角にも、アウグスト王子は自らが父王の名の下に緊急招集

した御前会議において、居並ぶ重臣や神官たちを前にしてこう言った。

「すぐさま迎撃の軍を差し向けねばならぬ。その指揮は、できうれば陛下御自らに執ってもらいたい。もしそれが不可能ならば余自らが出向しようと思つ」

隻眼をきらきらと輝かせながら、王子は最後に宇宙軍の最高司令官として最終決定権を握る父王バシレウス五世に視線を向けた。すると、

「殿下の仰せ尤もなれども、ここはひとまず冷静に御考えあるべきと存ずる」

重臣たちの答えは、王子の予想の斜め上に行くものであった。

「何をぬかす。考えている暇などない。ジュピウス軍は怒涛の勢いで我が領土を荒らしている。大勢の民が殺され、苦しんでいる。それを座して見守ることなどできぬ。最低限の犠牲で国土を守るには、一分一秒でも早い決断と行動が必要だ。本来ならば、こんなところでぐだぐだと議論している暇すらないのだ」

王子は若く血気盛んで、己の力で国を守らねばならぬという焦りがあった。父王はだらしなく頼りなく、重臣たちは基本的に自己保身にしか興味のない学歴バカだ。しかし、決定権を握っているのはこいつらなので、時間の無駄だとは思いつつも、御前会議を招集して承認を求めている。だが、議論をする気はなかった。承認さえくれば、それでよかった。

だからこそ、彼はそんな風にまくし立てたのだが、

「如何な殿下のご発言とは申せ、これは聞き捨てなりませぬ。陛下ご臨席の御前会議を、ぐだぐだ議論などと表現するとは、陛下の権威を軽んじておられる。我が王国においては、陛下の御決定こそが万事に優先いたします。殿下は、いずれ陛下になられる御身といえども今は陛下ではなく、陛下の御決定が下る御前会議を軽んじるが如き発言は誠に慎まれたし」

大官僚たちは、血気盛んな王子を糾弾しつつ、御前会議における主導権を掌握するべく攻勢をかけてきた。

「それと、殿下は迎撃のために今すぐ出撃すべきと仰られるが、そもそも迎撃したところで勝ち目などあるのですかな？ 聞けば、我が軍の戦力は最大で五〇〇〇隻程度とか。対するにジュピウス軍は第一陣だけで二万隻を数える。増援軍を加えれば四万隻という空前絶後の大軍ではないか。戦ったところで勝ち目があるとは万に一つも思えんのですかな」

官僚の一人で、今は内務大臣兼植民星担当大臣を務めているボニアティウス・ボルネフェルト公爵は、そんな風に言ってニタニタと不敵な笑みを漏らしていた。内相兼植民星担当相を務める前は、惑星アイラーンの総督やアストレア・シティ知事、アストレア警視庁の警視總監、国家公安委員長などの要職を歴任してきた大官僚で、バシレウス王からは一代公爵の位を与えられていた。御前会議の場に稀めく官僚集団の中では最年長の七十五歳で、それゆえに最長老のような立場で最大の発言力を持っている。

「ではボルネフェルト公。貴殿はどうすればいいと申すのだ？ 具体的な存念を申せ」

面倒臭そうに吐き捨てるアウグスト王子であったが、ボルネフェ

ルトは待つてましたと言わんばかりにスクツと立ち上がり、朗々とこう言った。

「もはやかくなる上は降伏する以外に道はなし。無駄に戦力を損耗した後に降伏を申し出たところで、先方は何もひっかけてはくれぬでしょうが、我が軍になお戦力ある今ならば、先方もある程度は譲歩してくれるはず。どうせ勝ち目のない戦をして全てを失うくらいであれば、潔く降伏し、力の温存を図るべきであると考えます」

「こ、降伏だと！」

戦うこともせずに降伏する。

そんな選択肢が存在するなど、若き王子の頭の中には全くなかった。しかし、この老官僚は平気な顔で降伏を進言してくる。頭がおかしいのではないか、況や、もしかするとジュピウスに買収されているのではないか……などという疑念が王子の頭の中を埋め尽くしていく。

「ば、バカな！ 一〇〇〇年の長きに渡り、自主自立の道を貫き続けたわがヴェスパニアが他国の奴隷と化すなどあり得ぬッ！ 公は正気で仰っておられるのか？」

「人の生命に限りがあるように、国家の命運も永遠のものではあり得ませぬ。一〇〇〇年続いたからとて、さらに一〇〇〇年続く保証など全くないのです。であれば、その時その時に応じて臨機応変に考え方や方針を変えていかねば、この乱世を生き抜くことなど不可能。お若い殿下にはまだお分かりいただけぬと思うが、意地や誇りのために、ジュリアン大王以来一〇〇〇年守り続けたわが国土、わが臣民を犠牲にするわけにはいかんです」

「……………」

尤もらしいことを言っているように聞こえなくもないが、アウグ

スト王子から見れば、どう言い繕っても所詮、売国発言に過ぎなかった。

全力を挙げて戦った末に敗れて降伏する……というのであれば、まだ納得もできる。だが、戦わずして降伏するなど、ヴェスパニア人の風上にもおけぬ卑怯な振る舞いだ。かつてジュリアン大王は、その凄まじき異能の力で、単身、圧倒的大軍に特攻を仕掛け、空前の大勝利をもぎとり、『隻眼の悪魔王』と呼ばれるに至った。大王はその実力で、当時衰退を始めていた銀河連合の再建に成功し、連合議会から王の座と、第一人者プリンセスの称号を拝領し、ヴェスパニア王国を作り上げたのだ。

そんな勇壮な王者の末裔が、大軍に怖れをなして戦わずに屈服する。こんなバカな話があるだろうか。

「陛下。……いえ、父上。父上は如何に御考えか。ジュリアン大王の末裔たる我らが、戦わずに降伏するなど、そんなバカなことがあってよろしいとお考えか？」

御前会議における最終的な決定権者は、この老官僚でも、若き王子でもなく、国王陛下にあるのだった。

で、その国王陛下ことバシレウス王はというと、随分とやる気のない顔をして、明後日の方向を向いていた。この人は、単に先王の嫡子として産まれたというたったそれだけの理由でやる気も能力もないのに国王となり、以来三〇年の長きにわたってヴェスパニア王国に君臨してしまっている極めて不幸な人で、趣味というと、後宮に作った庭園での庭いじりか、あるいは寵愛している后たちと戯れることぐらい。まあ、お金のかかる土木事業や、無駄な贅沢には全く興味を示さず、生活そのものは極めて質素なので、そういう意味では、無難な王と言えなくもないのだが……。

それにしても政治的な書類を見ると、それだけで頭痛に吐気を催し、政治的な話を聞かされると、五分後には卒倒してしまうという、

絶対君主制国家においては、とんでもない国王だが、今、この場において決定権を握っているのは、紛れもなくこの人なのであった。

「父上！」

そんな愚鈍な王子とは思えぬほど賢明で覇気に溢れる王子は、机をバンと叩いて父王に決断を迫った。

しかし、

「僕には決め難い。くじ引きで決めるがよかるう」

バシレウス王の言葉は、ある意味で期待にそぐわぬとんでもないものであった。

「く、くじ引き……………？」

国家が危急存亡の秋にあつて、それを打開する方針を決めるのに使う方法が、議論でも戦闘でもなくくじ引きなどという話は、王子も官僚たちも未だかつて聞いたことがなかった。

「では、もうよいな。僕は疲れたで、もう退出する。後のことは、そちらで決めよ」

そう言つて王は逃げるようにそそくさと御前会議の場から退散していく。

一方、残されたアウグスト王子や官僚、神官たちは、大いに困惑していたが、しかしそれが国王の御心とあらば従うしかないのである。

というわけで、早速神官たちがくじ引きを作り、持ってきた。

これを引くのは、次期国王であるアウグスト王子である。

そして、答えは出た。
そこには、

『降伏』

の二文字だけが堂々と記されていた。

「ば、バカな！」

王子は叫ぶが、誰も聞かない。
これが王と神の御決定である。
その一点張りなのであった。

だが、この程度で王子も諦めるわけにはいかなかった。戦わずして降伏するなど、ヴェスパニア王家の正統な血脈を受け継ぎし男として、許せなかったのである。

そこで彼は妹のローゼマリー・ジークリンデ・ディ・ヴェスパニアを呼び付け、こう言った。

「この前、お前には？英雄？の様子を下見させたはず。くだらぬ男というのがお前の感想だったようだが、今となっては、そのくだらん男の力を頼らざるを得ぬ。ゆえにお前が再び使者となり、？英雄？のもとに赴き、余のもとに連れてこい。一刻を争う、急げ！」
と。

一方、ローゼマリーの表情は不服そのものであったが、しかしこ

れは兄の敵命だった。逆らうわけにはいかない。
だから、

「承知しました」

恭しく頭を下げて、兄の期待に応えるべく全速でレオンハルト・ノエル・サンジュストがいるアストレア・シティの下町の方へと走り出した。

その後ろ姿を見つめつつ、

「終わらせんぞ。絶対に。ヴェスパニアは俺が守る」

若き王子は、その瞳を滾らせながら、静かに赤ワインをその口の中に流し込んだ。

第6話 童貞は捨てられない。

四月三日、午後。

煌々と輝く夕焼け空のもと、一人の少年が、大人の階段を上るべく、意を決して、王都アストレア・シティの裏町に店を構える遊郭の門をくぐろうとしていた。

神の力を手に入れたことよって始まった凄まじい鍛練にたった一日で根をあげてしまった彼は、悪友のマンフレートに誘われたことを良いことに、長年の夢をついに実現すべく、全てを投げ出してここにやってきたのである。

「……………いよいよ、か」

思わずごくりと息をのむ。

あの日、あの時、達成できなかった童貞卒業という夢。それを今、成し遂げる。

「緊張してんのかよ？」

そういう方面では百戦百勝の常勝將軍たるマンフレートは、ニタニタと楽しそうに笑いながらレオンハルトの肩をぼんと叩いた。

「女なんてな、特にこういうところにいる女なんてのはな、札束でぼんぼん引つ叩いてやれば、なんだってやってくれるんだよ。緊張する必要なんてないさ。それにあいつらは毎日毎日何十人って男と交わっているんだから、お前のことなんてすぐ忘れる」

「……………そんなもんかね」

今日が文字通りの初陣であるレオンハルトは、フウと深呼吸しつつ、おもむろに空を見上げた。

英雄になつて、正々堂々と童貞卒業を実現するんだ！

などと勢い込んでこっちの世界にやってきたものの、レオンハルト・ノエル・サンジュストとして過ごした十六年間で、彼は引き続き彼女いない歴〃年齢を貫いてきた。ようやく英雄への道を歩み始めたものの、この調子では自らのハーレムを作り上げるまでに少なくとも数年はかかってしまうだろう。そこまではさすがに待てない。お金の力に頼るのは、全く持つて不本意だったが、既に彼は上村光太郎時代とレオンハルト時代を合わせて三六年間も童貞を保ってきたのである。これ以上待つのは、正直無理だった。

「じゃ、行くぞ」

マンフレートが、記念すべき第一歩を歩み出すと、

「つてかお前、彼女はいーんかよ」

レオンハルトはその堂々たる後ろ姿に向かって突っ込みを入れてみた。

「彼女？ ああ、別に全然構わんよ。あいつらだって俺が遊び人だつてことは重々承知しているはずなんだし」

「……………」

「ま、とりあえずこんなところでぐだぐだ言つても始まりんさ。さあ、行くぞ。それとも臆したのか？ 臆病者め！」

そう言つてマンフレートはレオンハルトの裾を掴み、引っ張り、

半ば強引に遊郭の中へと入り込もうとする。レオンハルトはとうとなされるがまま門を潜り、そしてマンフレートが推薦する女性を指名し、部屋へ入ろうとした時、

「ここにレオンハルト・ノエル・サンジユスト殿はおられるか？」

図太く、重厚な声がどこからともなく響き渡って、遊郭中が騒然となった。

「え？ 俺？」

一方、唐突に響いてきた己の名前を耳にして、レオンハルトは戸惑っているだけである。

「御客人。外に今、王国政府の特使を名乗る御方がお越しになられておりますが」

そこへ店主が慌ただしく駆けこんできて、そう言った。

「王国政府の特使？」

「へえ」

「……なんだろう」

正直なところ、レオンハルトには全くと言って良いほど心当たりがなかった。将来的に？英雄？になる定めとはいえ、今の彼はまだ英雄でもなんでもなく、一介の一市民に過ぎないのだ。そんな彼のもとに王国政府の特使がやってくるとはいつたいなぜ？

とはいえ、王国政府の特使とやらがわざわざこんなところにまでやってきて、自分を呼んでいる以上、出向かぬわけにはいかなかった。

「ちえ。またこうなるのかよ」

レオンハルトはがっくりと項垂れてから、静かに部屋の外に出、そして、そこに犇めいている大勢の兵士たちを見て驚いた。

「こ、これは……な、なに？」

遊郭の周りを取り囲むように完全武装の数十人の兵士たちが取り巻いていたら、誰だつて驚くだろう。レオンハルトも決して例外ではなく、呆然と立ち尽くしていると、

「……かよつなところで真昼間からお遊び中とは……。これが未来の我らが？英雄？なのかと思うと、全く、わらわは情けない」

そんな風に言いながら、おもむろに一人の女性が彼の前に姿を現した。

ピンク色の特徴的な頭髪と、御人形のような端正な顔立ち、すらっとした体型を真つ黒なトーガで覆い尽くした美女。気品に満ちた圧倒的な存在感、風格を全身から漂わせている彼女のことを、レオンハルトは全く知らないわけではなかった。

「ま、まさか……」

驚いているレオンハルトに、

「左様、わらわはローゼマリー・ジークリンデ・デイ・ヴェスパニアじゃ。久しぶりじゃの」

女、ローゼマリー王女はそう言って呆れたようにハアと深いため

息を吐いた。

「お、お、王女殿下……。な、なんで、ここに……」

なぜ王女がこんなところに来たのか……というよりむしろ、なぜ自分がここにいることを王女が知っているのか。ユリアにだって教えてはいないというのに……。疑問でいっぱいのレストランに向かつてローゼマリーは苦笑しつつこう言った。

「なぜと申して、お主には常時監視役がついていないか。お主の行動など全て筒抜けじゃ」

「か、監視役……」

監視役という言葉に、心当たりは一つしかない。

コ タローだ。

しかし、今日ここに来ることはコ タローにだって教えてはいなかったはずである。なぜ、そのコ タローが知っているのか。

そう思った時、コ タローはおもむろにひょっこりとローゼマリーの長き髪の狭間から姿を現し、そして素早く飛び降りると、馴れた足取りでレオンハルトの肩の上にちよこんと腰を下ろした。

「つけていたのか？」

レオンハルトが苦虫をかみつぶしたような顔をして尋ねると、

「それが僕の任務だからね」

相変わらず感情のこもらぬ笑顔で、淡々と答えてくるコ タローであった。

「レオンハルト・ノエル・サンジユスト殿！」

そこに、話に割り込んでくるかのようにローゼマリー王女の甲高い声が響き渡り、レオンハルトは慌てて膝を折り、頭を下げた。

「面をあげよ。わらわは此度、兄上様の御命令を受けてその方を呼びに参ったのだ」

「お、王子殿下の御命令で？」

「ああ。その方の？英雄？としての力が是非とも必要になったのである」

「……………」

レオンハルトとてニュースに全く無知なわけではない。

いよいよ、ジュピウス帝国がその圧倒的大軍団をもってヴェスパニア征服の途についたことは、彼も知っていた。総兵力は四個艦隊四万隻四〇〇万人で、これに対するヴェスパニア軍の戦力がどう掻き集めても五〇〇〇隻五〇万人程度しかないということも知っていた。

しかし…………。

まだレオンハルトは、神の力を手に入れたとはいえども使いこなすことはできず、当然、この絶望的な戦況を覆しうる力などどこにもなかった。頼られても困る、というのが正直な思いであったのだが、ローゼマリー王女は気にする風もなく、兄上の命令だからと、従えている近衛兵たちに命じてレオンハルトを強制連行しようとしたのである。

そこへ、

「おい、なんだかしらねえけど、俺のダチを勝手に拉致するのはやめてくんねえかな」

勇ましく登場したのはマンフレートであった。

「その方は誰じゃ？」

ローゼマリーが尋ねると、

「よくぞ聞いてくれました。俺こそは、この界限じゃ知らぬ者はいない遊び人、マンフレート・マルクス・マティアス・アルムホルト様だ。俺の子分たるレオンハルトを勝手に連れて行かれちゃ困るんだよ」

彼は周りの空気など完全に無視してそんな風に胸を張り豪語してみせた。

「なるほどの。だが、この少年は王家の命令により王宮に連れていく。もしも抗うのであれば、お主は公務執行妨害の名の下に身柄を拘束せねばならぬ。それでもよいか？」

「……お、王家の命令？」

その台詞を聞き、改めてローゼマリーの威風堂々たる姿を見つめ直して、ようやくお気楽なマンフレートにも事の次第が何となく把握できたようであった。

「な、なあ。レオンハルト。これ、マジ話？」

恐る恐る、尋ねてくるマンフレートに、

「ああ」

軽く頷くレオンハルトであった。

「マジで？」

「ああ」

「マジかよ。マジで、こいつ……いやいや、この御方は王女様？」

「ああ。真正正銘、ヴェスパニア王バシレウス五世陛下の第一王女ローゼマリー・ジークリンデ・ディ・ヴェスパニア様だ」

「……………」

あまりのことに黙りこむマンフレートであったが、しかし、その程度で完全にだんまりを決め込んでしまうほど、この男の性根も柔ではないのだった。

「だ、だとしてもだ。王女殿下には悪いが、俺の子分を勝手に連れていくからには納得のいく説明が欲しいってもんだな」

彼はそんな風になんて言ってきたらとローゼマリーを睨みつけた。一方、レオンハルトは心の中で「子分じゃねえっての！」と叫んでいたが、当然の如く、二人を含めた周りの人間の誰の耳にも聞こえてはいなかった。

「ほお。納得のいく説明とな。我が兄、アウグスト殿下の命令と言っても、納得できんのか？」

ローゼマリーが尋ねると、

「ああ。納得できんね！」

反骨心旺盛なマンフレートであった。
すると、

「無礼者！」

どこからともなく叱責の声が上がったが、

「よし」

ローゼマリーはすかさずそれを制して、改めてマンフレート少年をぎろりと睨みつけた。

「なるほど。……気骨溢れる男よな。その男気に免じて説明してやりたいところだが、こんな町中で説明できるほど簡単な話ではない。もしも知りたいのであれば、その方も王宮に来るがよい。英雄の親友として、特別に招待してやろう。我が兄、アウグスト殿下より直接説明があるはずじゃ」

そして、彼女はそう言うてにやりと不敵な笑みを漏らすのである。一方のマンフレートは、思わぬ話に戸惑いつつも、

「面白い」

と、楽しそうに笑って、さほど驚いている様子はなかった。そんな彼を見て、

「くんなよ!」

レオンハルトは呆れたように吐き捨てたが、マンフレートは気に入る素振り一つ見せなかった。

こうしてレオンハルト・ノエル・サンジュストは、二度目の童貞卒業の機会を見事に失い、マンフレート少年とともに、王都アストリア・シティの中心に聳え立つヴェスパニア王国の中枢たるアストリア王宮に赴くことになったのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3494ba/>

童貞男は英雄となって異世界でリア充を目指す

2012年1月11日01時11分発行